

2016. 10. 27 (木)

相模原障害者殺傷事件について考える

三 浦 耕吉郎

相模原事件と私たち

皆さん、今日のチャペルのテーマは「人権を考える」というものです。じつは、私は毎年春学期、人権・差別問題論という講義で「人権を考える授業」を行ってきています。今年、その授業の内容と、大きくクロスするような事件がありました。

といいますが、この授業では、前半は安楽死・尊厳死の問題、後半は障害者への差別問題というテーマで7月上旬まで話しました。その月末に起こった出来事を、皆さんも覚えていると思います。この間、オリンピックがあったりして、はるか昔のような気がしますが、まだほんの3ヶ月前のことです。

相模原市の障害を持った人たちの施設で大量殺人が起こってしまった、大変痛ましい事件です。ただ、その容疑者とされている人は、まさに安楽死を施してあげたのだと言えます。そして、なぜそのようにしたかという、重い障害を持っている人たちにとって、毎日、生きていく意味はあるのだろうか、それが無いのであれば、いっそのこと楽に死なせてあげる方が本人にとっても幸せだ、という発想を容疑者が持っていたからです。

その行動は常軌を逸して19人を殺害して、25人に重傷を負わせました。これは

異常な行為だと言わざるを得ませんけれども、異常な人がやった行為である、自分たちとは関係ない人の犯罪だ、とは私には思えません。

人権・差別問題論では、授業の最初に「人権を守りましょう」とは口が裂けても言いませんと宣言します。この講義では、現在ある人権がどのように生み出されてきたのか、そして場合によっては新しい人権が生まれることもありますし、今ある人権が奪われてしまうこともある、といったように、人権が今日どのようなかたちで存在しているのかを見ていこうとする立場をとるのです。

そこで安楽死・尊厳死については、人に「死ぬ権利」はあるだろうかという観点から考えます。いかがでしょう、人間に「死ぬ権利」はあるのでしょうか。

重度の認知症だった父とのこと

まずは、容疑者のやったことが人ごととは思えない理由を申し上げたいと思います。これは私事ですけれども、父親が重度の認知症でした。最後の7年ほどは、千葉県流山市のグループホームで過ごしていました。

その父は去年の12月に亡くなったのですが、その7年間と、認知症を発症して3年

ほど自宅にいた期間も合わせると、関西からは距離がありますが年に4回ぐらいは東京出張に合わせて父に会いに行くというのが、私のこの10年間の習慣でした。

初めの頃は家族も一緒に行きましたし、父もそれほど認知症が重くなっていなかったので、会いに行くのは楽しかったです。けれども、だんだんと子どもたちが受験で忙しくなり、父の認知症も重度になってきました。重度になると身の回りのことを何もできなくなり、自己決定能力がどんどん落ちていきます。私や家族の顔や名前も分からなくなりました。

いろいろ話し掛けても、表情も反応も乏しくなっていく。私はそれを毎年、少しずつ見てきました。ただ、父は元気に歩くこともできて、最後は車椅子生活でしたけれども、寝たきりになることもなく亡くなりました。

その最後の数年、私は出掛けていくのがおっくうになった時期がありました。ホームまでは武蔵野の面影を残す農家が点在する風景の中を駅から20分ほど歩きます。私はその風景がとても好きで、歩くのも好きでしたけれども、だんだんと施設へ行く足取りが重たくなり、行きたくないと思うようになったのです。

なぜかという、父が私の言ったことに、言葉はあまり出しませんが、表情で反応を示してくれるときは、行ってから、孫たちが今は何年生になって、どんな部活をやっているなどと、父に自分の家族のことをしゃべります。父がそれに相槌をうってくれている頃はよかったのですが、ほとんど反応がなくなってしまったときに、今日も私は反応を見せない人にむかって一方的にしゃべって帰ってくるのかと、すごく虚しく感じてしまう

のでした。

安楽死を求める気持ちへの気づき

自分自身も、いつ認知症になるか分からない。私の祖母も認知症でしたし、父も認知症、いずれは私もという覚悟を徐々にしています。そんななかで一体、どんな思いが頭をよぎるかという、あのように生きてたくないなと正直なところ思いますし、あのようになるぐらいだったら、いっそのこと死んでしまいたいという気持ちが心のどこかにありました。

もし、安楽死という権利があったとしたら、それをするか、しないかは別にしても、その選択肢が私の頭をよぎると思います。認知症が重くなったら、おそらくあまり分らないと思いますが、特に認知症の初期は話を聞くとつらいようです。自分が認知症になりかけているという自覚があるって、すごく不安なことですよ。

今まで自分ができていたことがどんどんできなくなり、特に知的なレベルで自分が過去の自分でなくなりつつあることが分かる恐さは、想像をこえたものです。そのときに、もし、安楽死の権利があったら、選びたくなくなる自分がいるのは否定できません。

これは自分で自分の生死を選ぶという自己決定権の範囲内で考えていますけれども、安楽死を人に施すという行為も、自分に施すという行為も、本質的にはそう違いはありません。安楽死、あるいは尊厳死もそうですけれども、これらは死ぬ権利に関わる話です。それを人に対して施す場合、じつはそれを施す人たちは善意から行っていることが恐ろしいことなのです。

先の容疑者も衆院議長に手紙を書きましたが、善意に満ちあふれていて、善意に基づく殺意がそこにはみなぎっています。

そして、人に対して施すから殺意ですけれども、その殺意が自分に対して向かうと自殺です。自分に対して決定する場合は、安楽死も基本的には自殺の一種だと私は思います。つまり、容疑者が思ったことと私の心の中をよぎった思いが、決して別のものではないという部分が私にとってはすごく重くて、そして、まだ解決がつかない問題です。

認知症の人たちの居場所としてのグループホーム

私はその事件から3カ月のあいだ、ずっと考えてきました。いま、結論はもちろん出ていませんけれども、少し光が見えてきました。父が入っていたグループホームのスタッフの人たちとの関係の中に、一つの解き口が得られたように思えてきたのです。

そのグループホームの名前が、面白いんです。それは、「わたしの家」といいます。なぜそんな名前を付けたのだらうと、私は不思議に思っていました。認知症の人は徘徊（はいかい）します。もし、スタッフの人が見逃がしたら、1人でふらふらと出ていってしまいます。そんなとき誰かに家を聞かれ、あなたのおうちはどこですかと問われたときには、「わたしの家です」と答えさえすればいいわけです。だから、簡単でしょう？

私はそのネーミングが、なかなかチャーミングだなと思います。けれど、雨の日などは駅から歩かずにタクシーに乗ります。タクシーの運転手さんに「どちらまで」と問われて、「わたしの家まで」と言うと、始めの頃

は運転手のなかにも知らない人がいて、「???」となって結構恥ずかしかったです。でも、こんな名づけの仕方からも、このホームがなかなかユニークな発想をもっていることがわかってもらえるでしょう。

私が父に会いに行き、反応のない父に向かってしゃべり続けるのが苦痛になっていた頃のことです。それまでも、行くたびにスタッフの人は、この前私が来たときから今までの父の様子や、お花見や納涼会、敬老会という季節のいろいろな行事のことを話してくれていました。そのあと、私はリビングのような広い所で父と対することになります。横にも前にも認知症の方が三三五五座っているのですが、しゃべっているのは私だけです。重度の認知症の人は、ほとんどおしゃべりをしません。スタッフの人も常時2~3人いるのですが、それぞれトイレに付き添ったり、おむつを替えたり、食事の準備をしたり忙しくされています。

あるとき、私は父に向かって話しているつもりだったのだけど、じつはスタッフの人も折りにふれてその話の内容を気にかけてくれたことが彼女らとの会話からわかったのです。それからというもの、私は、父と同時にスタッフの人たちを意識して自分の家族のことを語り始めました。特に私は父に話すときに、「お父さん、あんなことがあったよね」と、父の昔話をいくつか投げ掛けます。

そしたら、テレビがついていないときなど、シーンとしていて聞こえてしまうので、私の話はスタッフの人たちにも伝わります。スタッフの人は、父の介護をするときに、僕の父は医者をやっていたので先生と呼ばれていたのですが、「三浦先生、昔、こんなことがあったのですね」と私のした話を父にふる

と、父が結構、反応をするということもあったようでした。

私の知らない父との出会い

それまではホームを尋ねても、5分もいたらいたたまれなくなって、すぐに帰るための口実を探しはじめたものですが、これで私の受けとめ方はがらっと変わりましたし、スタッフの人たちと私との関係もそれから変わっていったように思います。

そのうちに私は行くことが全然苦痛にならなくなりましたし、また、スタッフの人たちとも仲良くなりました。何よりも、父が認知症になって「わたしの家」に入ってから話をスタッフの人たちが私にどんどんしてくれるようになりました。

そのなかには、ホームに入っている認知症の人たちとスタッフの子どもたちが親密な関係をつくっているという話もありました。子どもたちというのは、スタッフの人たちが子どもを保育園に預けるよりも、自分のそばに置きたいから仕事場に連れてくるのです。家庭内では気難しがり屋だった父が、ここでは「癒し系のおじいちゃん」として、スタッフや子どもたちから人気があったという話なども初耳でした。

そのような話を聞く中で、認知症になったとしても、こんなふうに迎えてくれる人たちがいたら、そんなに死にたくなるほどのことでもないかな、と思いかけているというのが現状です。これからも私は、わたしの家に通いながら調査もして、そして、論文も書きますけれども、そのような過程で考え方がまだまだ変化していくでしょう。もし、私が認知症になったら、「わたしの家」に入れてもらうよう予約していますが、先日、そのときには住民票だけは移しておいてくださいと言われてました（笑）。

そのような関係になって、ちょっと光が見えてきました。だから、死ぬ権利については、私は基本的にはあり得ないことだと考えています。緊急避難的にする安楽死はあるかもしれませんが、人が自殺する、あるいは、その人のために殺してあげるといことは、権利として成り立たないと思います。ところが今、社会ではそのような権利が必要だという風潮が高まっていますので、さらにこのことを批判するために研究をしているといえるのでしょうか。取りあえず、いま考えているのは、ここまでです。ありがとうございました。

(社会学部教授)